

中世私撰集と古筆切

はじめに

近年、国文学界でも、和歌といわず、物語といわず、古筆切を利用した研究が盛んであるが、この古筆資料がもつとも有効に働く分野は、何といつても私撰集の分野であろう。なぜなら、平安・中世にかけて数多く編まれた私撰集の中には、今日、完本を伝えているものは意外に少なく、御裳濯和歌集・現存和歌六帖・雲葉和歌集・和漢兼作集・東撰和歌六帖・柳風和歌集・統現葉和歌集・松花和歌集・藤葉和歌集・安撰和歌集などのごとく、長い伝来の間に、その一部を失っていたり、また、如意宝集・麗花集・歌苑抄・拾葉和歌集・浜木綿和歌集・新撰風躰和歌集・新浜木綿和歌集・松吟和歌集などのように、早くその本文は散逸し、現在、古筆切という形でしか、その内容を窺い知ることができないものも少なくないからである。

こうした点を考慮に入れ、私撰集の研究における古筆資料の

田中 登

重要性を主張されたのは、久曾神昇氏の「私撰集と古写断簡の意義⁽¹⁾」と題する論文である。氏は古今和歌六帖・如意宝集・拾遺抄・麗花集・浜木綿集・松花集・松吟集その他の断簡を紹介しつつ、この分野における古筆調査の必要性を提唱されたのであった。

この久曾神論文に触発される形で、稿者もかつて単行本「古筆切の国文学的研究⁽²⁾」を公にした折、その中に「私撰集編」を設けて、この分野の古筆切を紹介するよう努めたことがあったが、本稿でも、近年、稿者の収集しえた中世私撰集を書写内容とする古筆切を何点か紹介し、併せてその資料的意義について述べておくことにしたい。

一 雲葉和歌集

雲葉和歌集は、藤原基家の編で、建長五（一二五三）、六年

ごろの成立。もとは二十巻から成っていたと思われるが、現存諸本に完本はなく、現在知られているのは、巻一から十までの前半部と巻十五（恋五）のみ。すなわち、恋や雑・神祇・釈教など、後半部の大半は失われてしまったのである。

しかしながら、古筆切の中には、伝二条為氏筆（藤原為家とも）四半切のごとく、その散逸部分の内容を伝えるものもあって大いに注目されるのであるが、これについては、すでに拙著『古筆切の国文学的研究』で紹介した。ここでは、覚源筆と称する切を紹介しておこう。

もと四半形の冊子本で、大きさは縦二一・五センチ、横一四・二センチ。一面十行詰となっている。書写年代は鎌倉の中期から後期にかけてのころであろう。該断簡は雲葉集巻六秋歌中、すなわち前半部の現存部分の切である。全文は以下のとおり（巻末の凶版一参照）。

大藏卿有家

はなをのみおしみなれたるみよしの、

こす糸におつるありあけの月

野月露涼

嘉陽門院越前

わくるたにさむけきのへのしらつゆに

よかれすやとるありあけのつき

野宿見月といふことを

祐盛法師

あけぬれは□□はにやとるかけもなし

ツレの断簡は少なからず伝存しているようで、小松茂美氏の『古筆学大成16』³⁾に凶版として六葉取めるほか、巻四夏歌の部が四十四首もまとまって伝わっており、注目されるが、これまで報告されている切に関しては、すべて雲葉集の現存部分ばかりのようである。しかしながら、今後、この伝覚源筆切のツレの中に、後半の散逸部分の切が見つからないとも限るまい。そうした切の出現を切に期待したいものである。

なお、雲葉集の古筆切としては、この外にまだ伝後京極良経筆の四半切があるが、こちらの方は伝存枚数はいたって少ないようである。

二 和漢兼作集

後宇多天皇の弘安年間（一二七八―一二八七）ごろに成立したとされる和漢兼作集は、平安から鎌倉にかけて漢詩と和歌とふたつながらよくした人の作品を集め、全体を二十巻にまとめ

たものだが、残念ながら現存本は後半の雑部を欠き、卷十冬下の途中までしか伝わっていない。しかしながら、古筆切の中には、この今は失われた和漢兼作集の後半部に属すると思われるものもあつて注意される。

該断簡は、江戸時代の古筆見によつて筆者を二条為道と極められた切で、稿者はすでにこの切を『平成新修古筆資料集 第二集』⁽⁵⁾に葉収めておいたが、ここに紹介するのは、それは別な断簡。もと六半形の冊子本で、大きさは縦一・五・三センチ、横一四・九センチ。書写年代はおおよそ鎌倉の後期といつたところであろう。全文は以下のとおり（卷末の凶版「参照」）。

老本も千代のはるそひさしき

寛治六年四月中宮入内の、ち松

色久緑といふ事をかうせられけ

るに 権中納言藤原季伸

みとりなる松のこすゑにかよふとて

風も千とせのそらにきこゆる

祝 大宰権帥源経信

君が代の程をはしらてすみよしの

まつをひさしとおもひけるかな

すみよしをのそみて

おそらく雑部の内の「松」の項の部分であろう。この切は、小林強氏によつても一葉報告⁽⁶⁾されているが、本来は漢詩と和歌を併せて二〇〇首にも及ぶ大部の作品かと推定されているだけに、今後もまだまだ散逸部の切の出現が期待できそうだ。

なお、近年その存在が知られた冷泉家所蔵の和漢兼作集は、鎌倉後期の書写本で、前半部のみならず、わずか八丁ではあるが、後半部の本文も持っているといふ⁽⁷⁾。影印本の一日も早い公開が心待ちにされることである。

三 新浜木綿和歌集

良宋によつて編まれた新浜木綿集は、八洲文藻にその序文が収められており、そこに「嘉暦二のとし、なが月の廿日比に、正応のふるき名をあらためず、かさねて新浜木綿和歌集といふこと、しかなり」とあつて、鎌倉末期の嘉暦二年（一二三二）の成立と知られるが、肝心の歌集本体の方は早くに散逸したとおほしく、現存伝本はなしという状態であつた。しかしながら、古筆切の中には、この新浜木綿集の内容を伝えるものがある。筆者を後醍醐天皇と伝える四半形の切がそれで、基準となるのは、『古筆学大成16』に収められている、東京国立博物館所

蔵の手鑑『桃花水』所収の断簡。⁽⁸⁾それは「新浜木綿和歌集巻第五／恋上」と、巻頭の集名・部類名を備えた切で、自余の断簡については、これを基準に見てゆけばよいのである。

この切については、以前にも『古筆切の国文学的研究』⁽⁹⁾に葉紹介しておいたが、ここに挙げるのは、最新出の断簡。大きさは縦・四センチ、横・五・四センチ。筆者の後醍醐天皇は無論単なる伝称にすぎない。書写年代は鎌倉に近い南北朝といったところであろう。全部は次の九行（巻末の凶版：参照）。

くものあとまてなをしくるらん

落葉似雨といふことを

法橋湛助

ふるをとやこのはなるらんまきのやの

しくれにをちぬのきの玉みつ

源忠顕

ねやちかきのきの玉水をとせぬは

このはあめのふるにそありける

月前落葉 清空上人

歌の内容からして、冬部の切であろうか。この新浜木綿集切を『古筆学大成16』では凶版として七葉を収めているが、久保木秀夫氏の『散佚歌集切集成 本文篇』では十八葉を集成・翻

刻している。⁽¹⁰⁾おそらくまだ今後も出現する可能性は少なくあるまい。

四 藤葉和歌集

康永四年（一三四五）小倉実教によって編まれた藤葉集は、現在十本ほどの伝本が知られているが、いずれも巻一・春・巻六・恋下までの欠本にすぎず、これといった有力な伝本にも恵まれていないようで、現に『新編国歌大観』も群書類従本を底本にしているほどである。だが、古筆切の中には、藤葉集が成立した時期をさほど下らないころに書写されたかと思われるものもあって注意される。それは筆者を小倉実名と伝える、もと四半形の冊子本で、稿者がかつて『古筆切の国文学的研究』⁽¹¹⁾の中で、この切を葉紹介し、それらには大観本の本文を訂正することが可能な箇所があることを述べ、大方の注意を喚起したのであったが、その後、杉谷寿郎氏によって、藤葉集の散逸部分の断簡も報告されたのであった。⁽¹²⁾

今回、紹介するのは、やはり藤葉集の散逸部分とおぼしき切である。大きさは縦……四センチ、横・五・三センチ。全文は以下の七行となっている（巻末の凶版四参照）。

花さかりなりける比中つかはしける

二 品法親王寛尊

身をしれはとはてそすくる君かすむ

やとの梢の花のさかりを

返し 前大納言尊氏

此屋戸をきみかとはねはさく花の

とかになしてそわれはうらむる

歌に花が詠まれてはいるが、現存本卷一の春部に出てこないところからすれば、今は失われた雑部あたりの可能性が大きからう。今後も散逸部分の切の出現を切に期待したいものである。

五 哀傷歌集

新撰古筆名葉集の明魏法師の項をひもといてみると、そこにはただ一種「巻物切 集末詳歌二行書草ノ汁ニテ卦アリ」という切が出てくる。ところが、昭和古筆名葉集では、この切について「古野切 集末詳歌二行書草ノ汁ニテ罝アリ八寸八分」となっていて、新撰古筆名葉集にはなかった「古野切」なる名称を採用している。この切名の由来は明らかではないが、この名葉集の記述に該当するかと思われる切が稿者の手元にあるの

で、ここに紹介することにしよう。

当該断簡の大きさは縦二六・二センチ、横四・五センチ。界高は二二・三センチで、界幅は約二・二センチほどとなっている。全文はわずかに次の二行にすぎない（巻末の図版五参照）。なきをしのふ袖のなみたまふりそひぬ

ふしみのさとの夜はの村雨

この古野切は著名な国宝手鑑や「古筆学大成」にも収められておらず、稿者は長らくその書写内容を明らかにすることができずにいたのであるが、最近になって、出光美術館所蔵の手鑑『浜千鳥』や『国宝』¹³の外の、総計九葉の古野切を集成・検討した別府節子氏は、これを南北朝時代のある禪僧が亡くなったのを悼んでゆかりの人々が詠んだ哀傷歌集ではないかと結論づけられたのである。これはきわめて蓋然性の高い推論といえよう。これに加えて別府氏は、この古野切の筆跡は伝称筆名の耕雲明魏（花山院長親）の真跡の可能性がきわめて高いともいう。その書写内容といい、筆跡といい、今後も十分注意されてしかるべき古筆切といえよう。

六 風葉和歌集

これまで紹介してきたものとは少し性格が異なるが、最後に風葉集の断簡桂切を取り上げておこう。風葉集はいうまでもなく物語歌集で、全二十卷（現存本はいずれも卷十九・二十を欠く）。文永八年（一一七二）の成立で、編者には藤原為家が有力視されている。

桂切に関する最も基本的な文献は、いうまでもなく中野莊次・藤井隆阿氏の『増訂校本風葉和歌集』⁽¹⁴⁾であるが、何しろ桂切は、書写年代も鎌倉の中期と古く、風葉集の原本とも目ざれているものだけに、その後も藤井降氏「増訂校本風葉和歌集」⁽¹⁵⁾以後の桂切「や久保木哲夫氏「風葉和歌集」欠脱部に關する考察」⁽¹⁶⁾など、増補作業は続けられているが、この切は江戸時代まである程度まとまって桂宮家に伝わっていたというだけあって、いまだ新出の切は跡を絶たない状態である。現に最近出版された村上翠亭・高城弘一阿氏の『古筆鑑定必携』⁽¹⁷⁾古筆と極札にも、卷十一・恋の断簡が「葉収められているが、ここに紹介するのも、ごく近年の出現になるものである。

伝称筆者は後伏見院。もとは四半形の冊子本で、大きさは縦二〇センチ、横一五・二センチ。一面の行数は本来は十行であ

ったようだが、当該断簡の場合、左端一行分が切り取られ、かつ二行分が擦り消ちされているため、全文は次の七行となっている（巻末の図版六参照）。

いかにせんたえなんもうしあおつ、ら

くるはくるしとおもふものから

みかとおもほしわすれたるにやと

おほえ給けるころ

秋夜なかしとわふるの斎院の母后

いつのまにちきりしことはわすれくさ

しけれなかとなしはてつらん

風葉集は卷十四恋四の断簡で、一首目の歌は散逸物語「独り言」の按察使大納言女の詠。すなわち風葉集の現存部分であるが、風葉集の現存本には、卷十九・二十の外にも、卷十三と卷十四には各一カ所かなりの欠落が見られるというから、場合によっては、桂切によって、その欠落部分を補うこともできるわけである。現にこれまでその存在が知られている桂切の中には、所属卷不明歌というものがあって、それがこうした欠落部分に該当するものと思われる。今後も、このような切が出現する可能性は大いにある。

戦後の古筆研究の頂点をなすのは、いうまでもなく小松茂美氏の『古筆学大成』全三十卷⁽¹⁸⁾であるが、その『大成』刊行後も、古筆研究は日進月歩の状態で、新出の古筆切の紹介も、次から次へと跡を絶たない、というのが実状である。

特に私撰集の古筆切は、本稿冒頭でも述べたように、散逸作品の本文復元に、あるいは現存本文の補訂にと、まことに有益なものが多くない。それだけに、諸書に紹介された古筆切を、いかに集成して行くか、それがこれからの大きな課題となろう。幸いにして、この方面では、久保木秀夫氏の『散佚歌集切集成 本文篇』⁽¹⁹⁾が、現時点でのひとつのあり方を示してくれているが、今後、さらにこうした集成作業を、いかに大規模に、かつ組織的に行っていくか、古筆研究は、今、大きな正念場を迎えているといつてよからう。

注

- (1) 久曾神昇「私撰集と古写断簡の意義」(国語と国文学 昭和四十六年四月号)
- (2) 田中登「古筆切の国文学的研究」(風間書房 平成九年

- (3) 小松茂美『古筆学大成16』(講談社 平成二年六月)
- (4) 伊井春樹「雲葉和歌集切拾遺」(本文研究 第二集、和泉書院 平成十年三月)
- (5) 田中登『平成新修古筆資料集 第二集』(思文閣出版 平成十五年一月)
- (6) 小林強「中世古筆切点描」(仏教文化研究所紀要三十六集 平成九年十一月)
- (7) 『冷泉家時雨亭叢書 第六期内容見本』(朝日新聞社)
- (8) 注(3) 参照
- (9) 注(2) 参照
- (10) 久保木秀夫「散佚歌集切集成 本文篇」(国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』三十三号 平成十四年十一月)
- (11) 注(2) 参照
- (12) 杉谷寿郎『平安私家集研究』(新典社 平成十年十月)
- (13) 別府節子「伝耕雲明魏筆 歌集切に関する考察」(出光美術館研究紀要五号 平成十一年九月)
- (14) 中野莊次・藤井隆『増訂校本風葉和歌集』(友山文庫 昭和四十五年一月)

(15) 藤井隆「増訂校本風葉和歌集」以後の桂切（鈴木弘

道教授退任記念 国文学論集 和泉書院 昭和六十年三月）

(16) 久保本哲夫「風葉和歌集」欠脱部に関する考察（平

安朝文学 表現の位相 新典社 平成十四年十二月）

(17) 村上翠亭・高城弘「古筆鑑定必携 古筆と極札」（淡

交社 平成十六年三月）

(18) 小松茂美「古筆学大成」全三十卷（講談社 平成二年

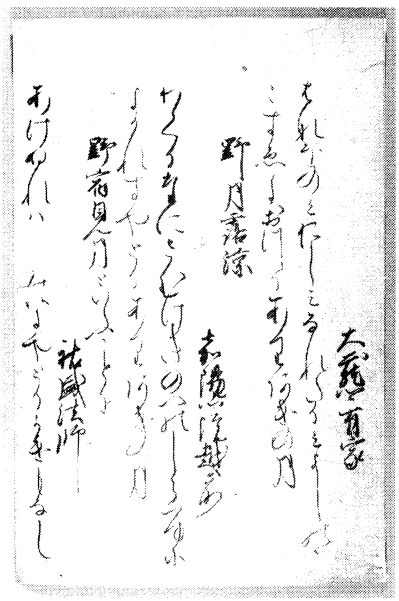
月～五年十二月）

(19) 注（10）参照

（たなか のぼる 本学教授）



図版 二



図版 一

